

学会参加報告

第70回日本小児保健協会学術集会に参加して

豊見城市 子育て支援課

保健師 玉城 万里恵

今回、令和5年6月16日（金）から3日間の日程で、神奈川県川崎市にある川崎コンベンションホールで開催された「第70回日本小児保健協会学術集会」に参加させていただきました。

「小児医療と保健の近接化を考える」をテーマに3日間で基調講演、会頭講演、特別講演2つ、教育講演14、シンポジウム7つ、セミナー2つ、一般演題155題の発表がありました。

会場となった、川崎コンベンションホールは武蔵小杉駅が最寄り駅で、周辺にはたくさんの商業施設や高層マンションが立ち並び、多くの家族連れの姿がありました。初日に乗ったタクシーの運転手によると、武蔵小杉駅は子育てしやすい街と言われており、駅前だけで子どもに関する買い物や遊び場、教育に関することが全て揃うとのことでした。

初日には、日本小児保健協会の小枝達也会長によ

る会頭講演「小児医療と保健の近接化を考える」がありました。成育基本法の推進のために、乳幼児健診の推進や子どもの自殺対策の他、記録の収集等に関する体制等として、「乳幼児期・学童時期・予防接種等の健康情報の電子化及び標準化」が掲げられており、よりたくさんの情報を収集し、分析することで、乳幼児健診や保健指導のエビデンスとすることができます。エビデンスとなる情報の収集を効率的に行うには、現在、実施市町村毎でバラバラになっている乳幼児健診の問診票を統一することが重要になってくるとお話がありました。沖縄県では沖縄県小児保健協会が主体となってくださり、県統一の問診票を使用していることから、沖縄県全体や地域ごとの課題、特徴を分析することができていると思います。このような取り組みが日本全体でも実践できると、より多くの健診結果から様々なエビデンスが



武蔵小杉駅駅前の商業施設や高層マンション

得られるのではないかと思いました。また、乳幼児健診の推奨の一例として、米国では1歳までの乳幼児期に7回、生後12～30か月までに5回、3歳から21歳までの間では年1回の健診が推奨されているお話がありました。かかりつけ医に継続的に成長発達を確認してもらえるとというメリットの他に、健診と事後相談がひとつのパッケージとされていることから、保護者も子ども達一人ひとりに合った、成長発達を確認でき、発達障害のように成長の途中でわかる疾病に対して、早期に介入でき、適切な対応を取る方法の提案や保護者の困り感へのアプローチができる場として健診が重要な役割をしていることが分かりました。現在、私たち保健師が行っている乳幼児健診では、米国と比べて回数が少ない分、限られた中でもしっかり子ども達の成長発達の確認し、保護者への適切な保健指導することや相談場所としての役割を果たしていかなければならないと感じました。

同日、行われた国立成育医療研究センターの五十嵐隆先生による基調講演「子どもをbiopsychosocialに捉え、支援する小児保健を目指して」では、健康とは身体・心理・社会的 (biopsychosocial) に良い状態 (well-being) とお話がありました。現在の日本の乳幼児健診では身体面の発達評価や病気の発

見等に重きがおかれ、心理的・社会的な観点からの評価があまりないとお話がありました。貧困や少子化等の課題が多くある現代で、子ども達の健康を評価する健診の場において、健診実施者は身体・心理・社会面の多角的な視点(ヘルススーパーヴィジョン)をもつことが求められています。日々、保健師として活動していく中で感じる、「なんとなく気になる」という気づきを、3つの側面からしっかり評価(アセスメント)し、どのような支援を行えば、子ども達を「健康」な状態にすることができるのかを考え、より効果的な保健指導を実践していかなければならないと感じました。

学会2日目には、国連子どもの権利委員会委員である弁護士の大谷美紀子先生による「健康についての子どもの権利」というテーマで特別講演がありました。医療や保健、福祉関係者の視点ではなく、弁護士としての視点からの大谷先生の講演では、国連の子どもの権利条約における「子どもの健康権」についてお話がありました。子ども達が健康であるためには大人のサポートが必要です。共働きが主となった現在では保護者の日々の家事・育児に加え、仕事とやるべきタスクが多すぎることから、保護者目線でどう効率的に育児をできるかという視点が多いように感じます。しかし、「子どもの健康権を守



A会場 (メイン会場)



講演会場の外には企業の出展ブースがありました。

る」という視点から、一番のサポーターである保護者へ対し、私たち保健師は乳幼児健診等の保健事業で、子ども達が最大限可能な発達成長できる環境を作り出すために必要な情報提供を繰り返し行っていくことが重要だと感じました。

大会3日目では、シンポジウム「これからの乳幼児健診」と題して、4つの演題がありました。特に、坂下先生の健診での心理社会的評価を可能とする「健やか子育てガイド」の講演では、コロナ禍における個別健診での効果的な心理社会的評価及び標準化された助言・指導を行うツールとして、「健やか子育てガイド」についてお話がありました。コロナ禍での個別健診での活用を目的に作成されたとのことでしたが、多くの情報が溢れている現代で、保健関係者が正しい知識を伝えるためには、「健やか子育てガイド」のような標準化された指導・助言を提供できるツールは集団健診の場でも有効ではないかと思いました。また、本市でどう進めていいかわからない状況だった乳幼児健診のDx化について、小枝会長によるDx化にマッチした乳幼児健診を目指しての講演をきっかけに、一緒に参加されていた那覇市の保健師の方から那覇市での取り組みを聞くことができました。この講演で得た、Dx化の意義や

那覇市での取り組み例を持ち帰り、乳幼児健診担当と共有し、本市の乳幼児健診のDx化に向けて取り組んでいこうと思いました。

今回の学会では、たくさんの講演やシンポジウム、セミナーから多くの新しい知識を得ることができた濃厚な3日間でした。特に、「子どもの健康」とは何か、子ども達の健康を守る立場としての「保健師の役割」や「乳幼児健診の意義」とは何かを再考することができたと思います。

また、コロナ禍で入職し、なかなか本市以外の母子保健関係者との交流がなかった私にとって、沖縄県小児保健協会の皆様や那覇市の保健師の方と一緒に学術集会に参加し、様々な意見交換や情報交換ができたことは、とても貴重な機会でした。

最後に、このような貴重な機会を下さった沖縄県小児保健協会の皆様、豊見城市子育て支援課の皆様へ深く感謝申し上げます。